

現代ツーリズムと歩き遍路

—「アウトドア」への展開—

野 崎 賢 也

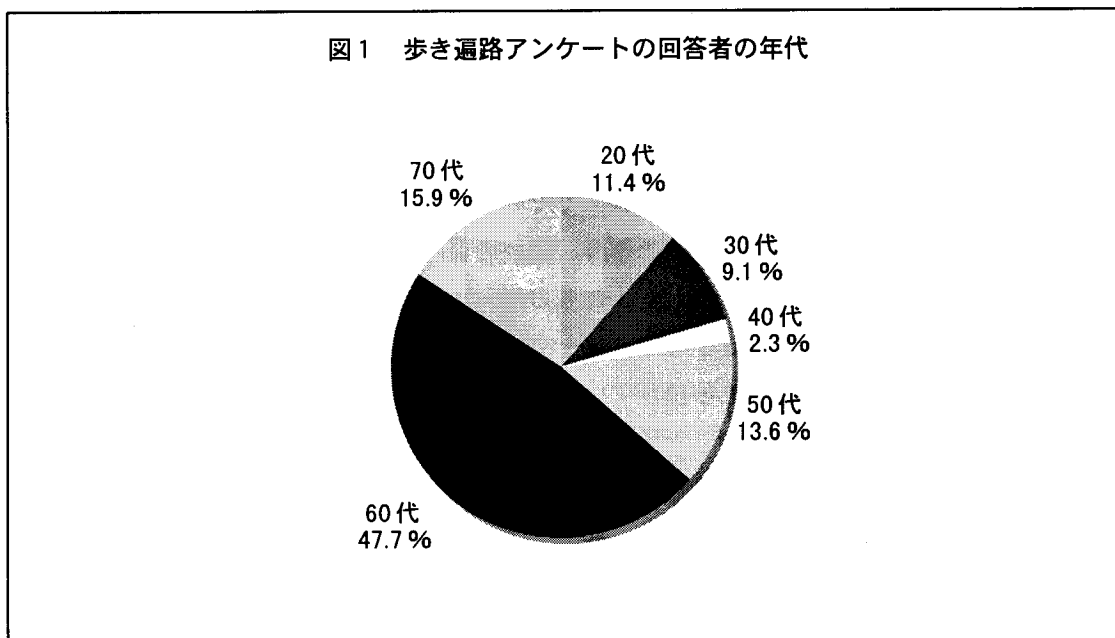
はじめに

四国遍路のなかでも、最近は「歩き遍路」が増えていると言われる。2006年秋には、NHKテレビの『趣味悠々』や土曜ドラマ『ウォーカーズ』といった番組で歩き遍路がテーマとされたように、歩き遍路は一種のブームになっているとも考えられる。中高年や若者の姿が目立つ現代の歩き遍路の実態について、2006年に実施したアンケート調査の結果を紹介しながら、歩き遍路の新しい傾向についても考えてみたい。

1. 歩き遍路へのアンケート調査概要

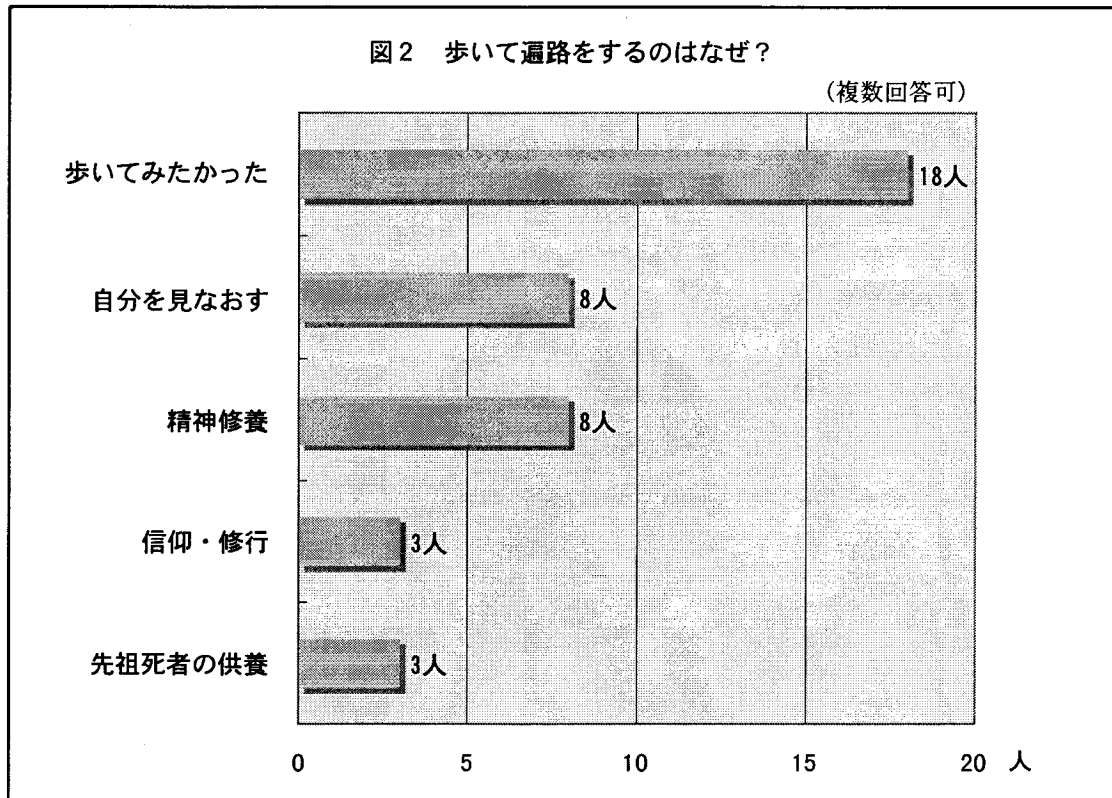
2006年春に愛媛大の共同研究グループで実施した遍路へのアンケート調査では、「歩き遍路」について通常の項目に追加して聞き取りを実施した。その「歩き遍路」調査の概要を以下にまとめる。

50番札所・繁多寺の門前で、2006年春の6日間、計461名の回答を得た遍路調査のうち、歩き遍路は44名であった。歩き遍路には、通常の項目に追加して、12項目の質問を行ったが、以下ではその集計結果の一部を抜粋して概要を報告する。



回答者の年齢層は、図1のように60代が最も多く、その前後の70代と50代が続き、20代が少し多い。逆にいえば、働き盛りの40代が最も少ない。この回答者の割合からも、中高年の歩き遍路が多いこと、また20代の若者の歩き遍路も比較的多いということが分かる。

(1) 歩いて遍路をするのはなぜですか。(複数回答可)



最も多かった回答は、「歩いてみたかった」の19名である。次に、「精神修養」（8名）と「自分を見なおす」（8名）が続いている。「先祖死者の供養」と「信仰・修行」を挙げたものは3名ずつとなっている。

自由記述欄に書かれた具体的な理由を拾い上げて並べてみると、「わからない」、「興味」、「人間の根本」、「本来の姿に近づくため」、「挑戦してみたかった」、「やせるため」、「健康のため」というものと、「歩くのを楽しみたい」、「歩くのが好き」という歩くことそのものに触れた回答があった。

以上の結果から、「歩き遍路」を行う動機は、死者の供養や信仰・修行などの宗教的なものが思ったよりも少なく、「歩く」という行為自体を積極的・肯定的に捉えて目的化していることが分かる。

(2) これまでで気持ちよく感じられた遍路道はどこですか。

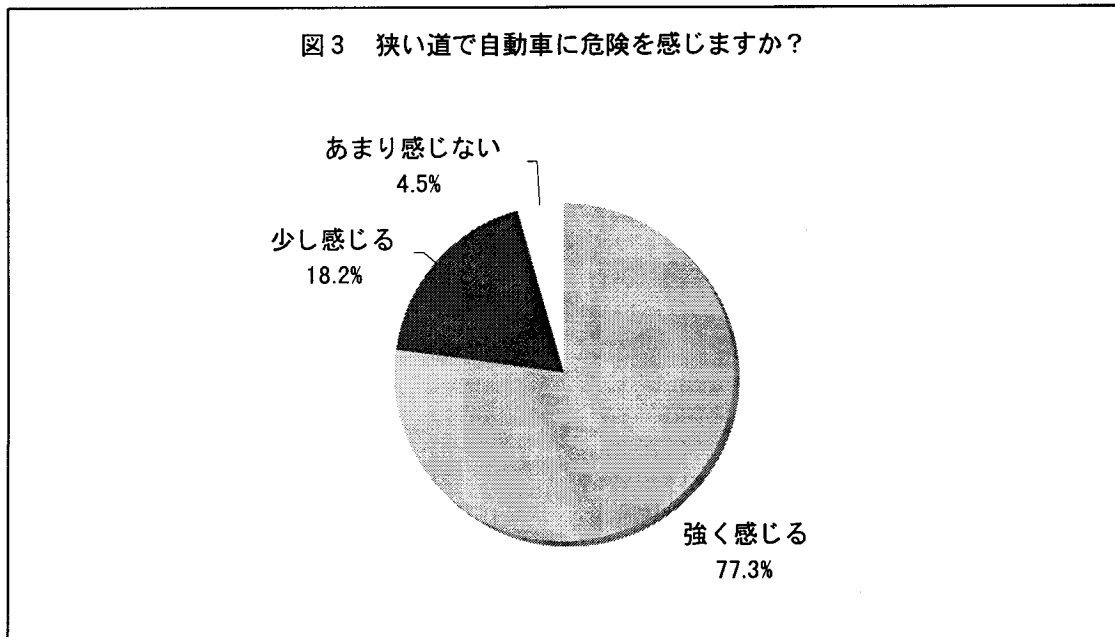
自由記述で聞いた結果では、歩きやすさから「土の道」を挙げたものが多く、景観などの面から「海岸線」や「山の道」を挙げたものも多かった。

(3) 舗装された道路の堅さは気になりますか。

「大変気になる」（25名）、「少し気になる」（12名）という回答で、合計約85%が、舗装道路の堅さが気になったと答えている。

(4) 狭い道で自動車に危険を感じますか？

「強く感じる」(34名)、「少し感じる」(8名)、「あまり感じない」(2名)で、合計約95%が、狭い道での自動車とのすれ違いに危険を感じていた。



(5) 歩く距離が長くなっても狭いトンネルや車道を避けたいと思いますか。

「そう思う」(33名)、「思わない」(11名)で、合計約75%が歩く距離が長くなっても交通の危険を避けたいと回答している。

(6) 遍路道がどのようなものになるのを期待するか。(複数回答可)

最も多かった回答は、「道しるべの多い道」(21名)であり、次に「自動車道路と分離された道」(19名)となっており、自由記述では、「土の道がいい」、「これ以上手を入れないで欲しい」という回答もあった。

以上の(2)～(6)の回答結果から、歩き遍路にとって、現状の自動車道と隣り合わせの舗装された遍路道については、交通の危険や足腰への負担の面から不満が多いことが分かる。歩く距離が長くなってもトンネル等を避けたいという回答の多さや、土の道がよいという記述などから、「歩く道」として、歩く人の立場から、遍路道の現状を把握し改善の方策を探っていくことが大きな課題の一つであると言えるだろう。同様に、「道しるべの多い道」を求める声も多く、土地に不慣れな人たちが「歩く道」として、遍路道の整備が求められていると言える。

(7) お接待を受けたことがありますか。

「ある」が全員(44名)となっており、歩き遍路では多かれ少なかれ、必ず「お接待」を受けている。

(8) お接待についてどう思いますか。(複数回答可)

「ありがたい」(41名)、「お互い様である」(3名)、「必要ない」(1名)となっており、ほとんどの人がお接待を肯定的に捉えている。

(9) 歩き遍路でよかったことがありますか。(自由記述)

「お接待」や「人との交流・出会い」、「親切にされたこと」を挙げた回答が多かった。次に、「あいさつされること」、「道案内をしてもらった」などについての記述も目立った。

(10) 歩き遍路で難儀な思いをしたことはなんですか。(自由記述)

「雨や雪・台風」などの天候について、「目的の場所に宿がない・宿がとれない」、「道に迷った」などを挙げているものが目立った。

(7)～(10)の内容をまとめると、歩き遍路は基本にお接待を受け、それについて「ありがたい」と思い、またお接待や親切にされた経験を肯定的に受け取っている。また、歩き遍路の苦労では、悪天候など以外に、土地に不慣れなことによる宿探しの苦労や、道の不案内について多数挙げられていることが目に付いたが、ここからはやはり「歩く人」の立場になって遍路道の整備を行うことが急務であると言えるだろう。

2. 現代ツーリズムと歩き遍路

前節で「歩き遍路」のアンケート調査の結果を簡単に紹介したが、こうした「歩き遍路」の状況について、解釈の枠組みを「巡礼」から広げ、それを現代のツーリズムのなかで考えてみる。

現代日本のツーリズムの大きな流れとしては、名所旧跡などを巡る団体旅行に象徴される「マス・ツーリズム」から、個人化への移行が進んでいるといわれる。その流れを代表するのが、「歩く」ことを目的とする旅であろう。「歩く」のは、各自の足が唯一の頼りであり、他人に替わってもらうことはできない。必然的に「歩く旅」は、比較的少人数のグループか単独で行うことになる。その個人化するツーリズムの行き着く先は「単独」の旅である。

前節で見たように、「歩き遍路」の動機として最も多かったのが「歩いてみたかった」という理由であった。「歩くこと」は、困難や修行なのではなく、歩くことそのものを目的としているとみなすことができる。そのことから、歩き遍路は、個人・単独の旅の一つの形態として、現代的なツーリズムの中に位置づけることができるだろう。

3. 「アウトドア」としての歩き遍路

歩き遍路は、その外装からも一見して分かるが、多くは(特に若者)、トレッキングシューズを履き、バックパックを背負った「バックパッカー」という旅行者のように見える。「歩き遍路」を一種の「アウトドア」や「トレッキング」と捉えて、雑誌や単行本など「アウトドア系」のメディアで紹介されたことがあり、その意味について以下で考えてみたい。

『BE-PAL』は小学館発行の月刊誌で、読者は20代～40代が中心の比較的若い世代向けの「アウトドア」を主題にした雑誌である。創刊は1981年、現在の発行部数は約22万部で、「アウトドア系」の雑誌のなかでも歴史があり、部数も多く、最も普及している雑誌の一つである。この『BE-PAL』の2003年1月号が、特集として遍路を取りあげている。表紙の見出しには、「日本にもあるぞ! 1100kmの超ロングトレイル」とあり「四国お遍路バックパッキング」と題した特集名で、歩き遍路のための「マニュアル」的な内容になっている。具体的には、歩き遍路の道中に役立つウォーキングやビバークの知識や情報など「アウトドア」のガイ

ドであり、グッズの紹介やマップも付属している。

また、この特集が好評だったということで、『四国お遍路バックパッキング』（2003年）という単行本が小学館より発行されることになった。この単行本の内容も、歩き遍路に必要な「アウトドア」や「トレッキング」のノウハウを解説し、八十八ヶ所のマップや、必要なグッズ類の紹介が付属している。

以上の経緯について、『BE-PAL』の特集号と単行本の双方を担当した編集者・秋窪氏にインタビューを実施することができたのでその内容を簡単に紹介する。「アウトドア」として歩き遍路を取りあげたことについては、自然な成り行きだったそうだが、振り返ってみると「アウトドア」の延長として歩き遍路を取りあげたのは、同様な雑誌の中では最も早かったということであった。若者から中高年まで反響が大きく、特に具体的なアウトドアのノウハウやウォーキングに役立つ詳細なマップが好評だったという。この号の後に雑誌としてもう一度、遍路を特集で取りあげ、その後作った単行本も好評で、現在まで版を重ねている。

また同様に、「アウトドア系」の他の雑誌を発行する出版社からも、吉田智彦『四国八十八ヶ所を歩く』（山と溪谷社）という歩き遍路のガイドブックが2006年に発行されている。

筆者なりに、「アウトドア」や「トレッキング」として歩き遍路の意味を解釈すると、歩き遍路では、単に四国の自然を体験するだけでなく、お接待などで人の親切に触れ人との交流が必ず存在することから、「人と自然」に同時に会おう旅だと考えることができる。それは、現代のツーリズムが、単に名所・旧跡などでなく、あるいは自然だけでなく、「人との出会い」を求める傾向にあることと同期していると捉えてよいだろう。

いま、「歩き遍路」は、「巡礼」の枠を超えて、個人の旅として、また、「人と自然に同時に会おう旅」として、幅広い意味を持ちつつあるといえるのではないだろうか。

4. 歩き遍路と現代ツーリズム

以上の本稿の内容を簡潔にまとめると次のようになる。

2006年春に実施した歩き遍路の調査から、限られたサンプル数ではあるが、その動機が、信仰や供養といったなんらかの形で宗教に関連するものよりも、「歩くことそのものを目的とした旅」という形態が拡大している。歩く行為そのものを積極的に捉え、それを目的にする旅は実際に増加しており、それは、歩き遍路を「アウトドア」として捉えるものも含んでいる。

そして、このことから歩き遍路という旅が可能であり許されている四国という土地の特徴もはっきりする。四国は、地域の住民の生活空間を「余所者」が歩く旅が公認・保証されている、いわば「歩く旅ができる土地」だと考えることができる。それは単に自然に出会うだけでなく、お接待などを通じて人との交流があり、「人と自然」の双方に出会う旅である。この意味で、旅人を受け入れる側も、お接待をきっかけに「まちづくり」につなげようとしている地域が愛媛県内だけでなく四国各地にひろがっている。

現代の「歩き遍路」をツーリズムの視野から見てみると、旅の主体の変化と同時に、それを受け入れる側の地域の対応も含めて、こうした社会的な文脈における遍路の存在についても注目していくことが必要だろう。

【参考文献】

『BE-PAL』、2003年1月号、小学館

『四国お遍路バックパッキング』、ホーボー・ジュン&BE-PAL編集部、2003年、小学館

『四国八十八ヶ所を歩く』、吉田智彦、2006年、山と溪谷社